

ヨハネの孤独な質問

イザヤ書 61 : 1

マタイ 11 : 2~6

<イザヤ書 61 : 1>

主はわたしに油を注ぎ、主なる神の霊がわたしをとらえた。わたしを遣わして、貧しい人に良い知らせを伝えさせるために。打ち砕かれた心を包み、捕らわれ人には自由を、つながれている人には解放を告知させるために。

<マタイ 11:2~6>

ヨハネは牢の中で、キリストのなされたことを聞いた。そこで、自分の弟子たちを送って、尋ねさせた。「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」 イエスはお答えになった。「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。わたしにつまずかない人は幸いである。

今朗読した聖書を見ると、主イエスは言われました。「わたしにつまずかない人は幸いである。」

それは、主イエスと共にいながらも、主イエスによってつまずくことがある、つまり、信仰があるゆえに、わたしたちをつまずかせるものがある、ということです。しかし、それにもかかわらず、つまずかない人は幸いである。だから、つまずかないようにとおっしゃっているのではないのでしょうか。

洗礼者ヨハネを通して、そのみ言葉の意味を学びたいと思います。

マタイによる福音書 3 章に出てくる洗礼者ヨハネのは堂々とした力強い姿です。徹底的な確信を持って、揺らぎない姿で神の到来について宣べ伝えていました。彼はらくだの毛衣を着、腰の皮の帯を締め、いなごと野蜜を食べ物としていました。そこで、エルサレムやユダヤ全地域から大勢の人がヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川で、ヨハネから洗礼を受けました。ヨハネはファリサイ派やサドカイ派の人々が、大勢、洗礼を受けにきたのを見て叫びます。「マムシの子らよ、差し迫った神の怒りをまぬかれると、だれが教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ」。本当に恐れを知らない、聖なる堂々な姿です。

当時、ローマの支配の中で苦しんでいたユダヤの民は、神様からの救い主が現れるのを待ち望んでいました。旧約の中に約束されている解放者、メシアを切に待ち望んでいたのです。そのような民に、洗礼者ヨハネは救い主が現れることを力強く知らせていました。そして、そのように待ち望んでいたメシア、主イエスに出会うことが出来たのです。洗礼者ヨハネは彼から洗礼を受けようとする主イエスに、「わたしこそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが、私のところへこられたのですか」と言います。

また、ヨハネは「わたしより優れた方が後からこられる。私はかがんでそのかたの履物のひもを解く値打ちもない、私は水であなた方に洗礼を授けたが、その方は聖霊で洗礼をお授けになる。

その方は栄え、私は哀えねばならない」と言いました。イエスがメシアであることを確信している言葉であります。この民族をこの苦しみから解放してくださる方がおられた。正義と自由の神の国が近づいた。いかに嬉しいことであるか、声高く述べ伝えよ。洗礼者ヨハネは希望と喜びにあふれて、力強く伝えていました。

しかし、そのような洗礼者ヨハネは今、悲劇的な人生の終末を迎えようとしています。自信感をなくし、無力感に捕らわれています。なぜでしょうか。

当時のガリラヤの支配者ヘロデ・アンティパスはローマにいる弟を訪問中、弟の妻と不倫な関係に陥り、帰国後、自分の妻と別れて、弟の妻をその夫のもとから連れ出して結婚をします。福音書にはそのことについて洗礼者ヨハネが非難したと詳しく書いています。レビ記 18 章 16 節にはこのように書かれています。「兄弟の妻を犯してはならない。兄弟を辱めることになるからである。」そして、20 章 21 節にも「兄弟の妻をめとる者は、汚らわしいことをし、兄弟を辱めたのであり、男も女も子に恵まれることはない」と書かれています。

王ヘロデは確かに罪を犯しました。ヨハネは相手が王であってもその罪を見過ごすことが出来ませんでした。ですから、そのことについて指摘しました。そのようはヨハネをヘロデは、監禁してしまいました。ヨハネは今、風も通らないところに閉じ込められて死を待っているのです。そのようなヨハネが、この方こそメシアであると確信していたイエスに向かって「来るべき方はあなたでしょうか」と問い掛けているのです。

「私が熱心に待ち望んでいた方、メシアは本当にあなたでしょうか、」。死を前にしてヨハネは確かさを求めています。「主イエスよ、あなたがメシアならば、メシアとしてのしるしを見せてください。一体いつ悪人を滅ぼさせ、あなたの聖なる救いの業を成すのでしょうか。いつ神様の裁きの日があるのでしょうか」「私は私の人生の終わりの日が来るまで、この牢の中で無力にいななければならないのでしょうか。このまま死を待たなければならないのでしょうか。あなたは本当に来るべきお方であるのでしょうか。もし、あなたがメシアであるならば、私はこのまま死んでもいいのです。あなたこそ、私が切に待ち望んでいたメシアでしょうか。はっきり教えてください。」そのような問いをしていたのではないのでしょうか。

イエスについてきた人たちは、海で魚を捕っていた人たち、民族の裏切り者として扱われていた徴税人、そして、売春をしていた女のひとと子どもたちでした。いわゆる、無学で貧乏で力がない人たちであり、汚れた人たちもいました。力ある知識人と政治家たちは、神のことを教えている宗教家たちも、イエス様を無視し、イエス様の存在さえ認めようともしませんでした。それがイエス様が言われた神の国の始まりでした。

イエス様によって癒され、助けられた人たち、そしてイエス様を理解することはできなかったが、イエス様によって心が動かされた人たちだけが、ほんの少しの人たちだけがイエス様の周りに留まっていました。イエス様は、見るべき面影もなく、輝かしい風格も、好ましい様子もなかったのです。イエス様は人々に軽視され、見捨てられました。

洗礼者ヨハネは、自分の期待とは違っていた、そのようなイエスの姿に焦りを感じていたのかもしれない。しかし、彼は今、死を前にして根本的な質問をしているのです。私が全存在をかけて行っていた、この信仰的な業、私の献身は本当に意味あることだったのでしょうか。つまり、今までの私の人生は無駄ではなかったのでしょうか、と問うているのです。

私がすべてをかけて追い求めていた真理の道、これは本当か、嘘か、私の期待は幻想であったのか、なぜ、私はこのようにならなければならないのか。そのような、様々な葛藤に陥っていたのではないのでしょうか。しかし、ヨハネはそのような葛藤や質問を独り言の中で沈ませてしまうことはしないのです。その問いを主イエスにもっていきます。「来るべき方はあなたでしょうか。」

あなたは私たちが待ち望んでいた真の救い主、私が確信していたメシアでしょうか」。自分の葛藤と苦悩を主に打ち明けているのです。

ては、そのような洗礼者ヨハネの質問に主イエスの答えはどのようなことだったのでしょうか。それに対して、主イエスが「あなたが信じているその通りだ」と一言はっきりおっしゃってくださいならば、それで、ヨハネはそれを信じ、満足していたのかもしれませんが。

しかし、主イエスは言われます。「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、らい病をわずらっている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。私につまずかない人は幸いである。」主イエスはご自身がだれであるかを直接に言っていません。

これからも絶えず苦難と死がこの世の中にある。戦争は続くだろう。悪人は善人を苦しめるだろう。理解できない矛盾がこの世に絶えず存在するのだろう。しかし、私の言葉が聞かれる人たちに何が起っているのかを見なさい、病に掛かっていた人が癒される。不幸な人が慰められる。傷ついた良心が回復される。私は教えようとするのではなく、癒そうとしている。私はあなたが望んでいるような革命家ではない。悪人を打ちつぶし、この世の悪を破壊するために今ここにきているのではない。私の行いは愛である。小さく見えるようなこの愛による奇跡を見なさい。主イエスはこのように言われたのではないのでしょうか。

目の見えない人が見えるようになります。神の国を見ることが出来ます。

足の不自由な人が歩けます。らい病を患っている人が清くなります。絶望から生きる希望が与えられます。耳の聞こえない人が聞こえるようになります。福音の知らせを聞いて新しい人生が始まります。死者が生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされているのです。神さまの奇跡を知ることができるのです。神様の御手の力によって生かされる者になるのです。

では、このような主イエスの答えは、ヨハネの質問に対する答えになったのでしょうか。

これは、ヨハネ自身が最後の言葉を言わなければならないのです。主イエスにした質問は、質問者ヨハネに向けられ、ヨハネ自身が答えなければならないのです。主イエスがメシアであることを信じるか、信じないかという答えをヨハネ自身が自ら答えなければならないのです。なぜならば、主イエスが来たるべきお方、メシア、救い主であるか、ないかは、ヨハネ自身が自ら告白し、示さなければならない信仰の問題であるからです。主イエスはヨハネの心に訴えているのです。

現実がどうであれ、主を信じ、自分自身のすべてを委ねるとき、私たちは主イエスの奇跡のみ手が私を癒すのをはっきり感じる事が出来るのです。そして、そのとき、主イエスこそ、来るべきお方、私たちの唯一の救い主であることを知ることが出来るのです。

神様が何かをはっきり言ってくださり、何かを見せてくださるならば、わたしたちの信仰的な葛藤もないのに、神様はそうなさらないのです。なぜなら、信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することであるからです。信じて主に自分の人生を投げる人だけが味わう神秘であるからです。主が救い主であることを確信して委ねる者に開かれる道であるからです。ですから、信じる事が出来ない人にはつまづきです。見えるものを求める人にはつまづきです。しかし、信じる人には幸いな、必ず報いてくださる約束の道なのです。

主イエスにとっても十字架での死は取りのけてもらいたい、苦痛と恐怖の道でした。それで、「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯を私から取り除けてください」と汗が血のように流れるほど、切に祈られたのです。その道があまりにも苦しくてそれを避けるため

に必死に祈られました。しかし、主イエスの祈りは「私が願うことではなく、御心に適うことが行われますように」と終わったのです。神様に対する徹底的な信頼と従順のお姿です。

私は、神様がお造りになったこの世に、なぜ、このように数え切れないほどの悪が存在しているのか、神様の義を求め、真実に生きていこうとする人たちに、なぜ苦難と試練があるのか、わかりません。神を信じる私たちの道にある、この孤独と痛みがいつ終わるか、わかりません。私たちの前に横たわっている、この死や暗闇からの恐怖を、どうすればよいのか、わたしにはわかりません。

しかし、これだけは知っています。

私のために、この世に来られ、私のために血を流し、十字架で死んでくださった主イエスが、来るべきお方であることを。救い主であることを。

私の願いや問いに対する主イエスの答えは、私が望むような形としての答えではないかもしれませんが。理解できないことがあるかもしれませんが。しかし、確かなことは、主イエスは私たちの救い主、きたるべきお方であるということです。私たちのために、この世に来られ、十字架の上で血を流された主イエスは私たちの唯一なる救い主です。すべての審判者として来るべき方です。そのような主イエスに希望をおくとき、主イエスが支配する愛と平和の神の国に生きることができるのです。

主イエスを救い主として告白する人だけが、信仰によって生きる人だけが死と悪に打ち勝ち、復活なされた主イエスの真の勝利を味わうことができるのです。

祈ります。

神様、心痛むもの、弱い者、迷い苦しんでいる者を慰め、顧みてください。

信仰がない者をどうか助けてください。あなたにつまずかれそうなものがあるならば、助け、支えてください。全世界に、この日本の地に、あなたの御心が適えられますように。あなたの愛と平和のみ国がきますように。どうか私たちを憐れんで下さい。

私たちの世界を、私たちの現実を癒してください。

私たちのために十字架で死んでくださり、その死を打ち勝って、復活なされた、勝利の主イエス・キリストのみ名によって、お祈りいたします。 アーメン。